

目的：本論の目的は、勤労者世帯の家計奥能を従来の家計研究にみられるような、単年度を中心とした分析ではなく、生涯における生計費を対象にして、それを収入階級と分位に分けて考察し、トータルとしての生計現象にみられる法則性を明らかにしようとするところにある。その場合の条件設定は、ライフステージ別に家族形態を推定し、各ステージ別に考慮ができるように配慮したものである。

方法：総務庁より申請によって入手した全国消費実態調査の原本データを、独自の換算方法によって、年間データに変換し、そのデータをモデル世帯にあわせて再集計することによって、収入階級と分位別生計費を収入・支出の両側面から算定した。この結果を基にまず従来にみられる家計法則であるエンゲル及びアレン、ボウレーの法則について現代における妥当性を検討した。次に、各ライフステージ別に、収入階級と分位別の分析を試みることによって、これまでの単年次のみによる分析ではつかみにくかった生涯における生計現象にみられる法則性の検討を行った。

結果：この研究の第1段階において、本研究独自の方法によって、収入階級と分位別に生涯生計費を収入と支出の面について算定ができた。また、その分析により、従来の家計法則についての検証がなされるとともに問題点の発見が成された。最後に本研究独自の生涯生計費動向の分析によって、ステージ及び分位ごとに特徴的な動きを示す費目を見出すことができた。それを生涯というレベルでの生計費研究における新たな知見として得ることができた。